

保育者養成における総合的表現教育「子ども会実習」の実際

～表現教育の実際Ⅰ：児童文化～

Integrated Educational Activities for Self-Expression in Fostering Kindergarten Teachers through the Process of Creating Theater for/with Children

指田 利和
SASHIDA, Toshikazu

キーワード：保育者養成・表現教育・児童文化

1. はじめに

幼児教育や保育の現場で、日常的な遊びの延長線上にあるものとして園全体で取り組む生活発表会、表現会等には様々な種類、活動内容がある。本学では、こうした児童文化活動の中で児童文化財をどのように生かせるかを実践的に学ぶ場として、「総合専門領域」において「児童文化」を開講している。（保育士選択必修、2単位、3・4年次、秋学期）

本学の「児童文化」は、単に教科書に沿いながら保育者となる学生たちが一般教養的に児童文化の概要を“学ぶ”のではなく、とくに想像あそび、表現あそび、劇あそび等の「劇的表現活動」について、子ども自身が「あそび」を発見し、仲間との関わりを通して展開、発展できるための指導のあり方について学ぶ「子ども会実習」を中心に、学生が“会（グループ）”の運営を通して、人形劇、朗読劇、参加劇等の児童文化財を、子ども（とくに幼児）のために研究・創造・発表することを特色としている。「実習」と名づけられているのは、こうしたプロセスから優れた児童文化財を選ぶ目と与える力、幼児についての理解、グループ・ワークを体験的に身につけることをねらいとしているからに他ならない。

本稿ではまず、「子ども会実習」の概要を紹介し、次に2012年度の実践結果を報告する。とくに実践報告としては授業のねらいをどのように学生たちに意識させたらよいかについての試みをまとめた。「昨今の実習生はねらいを意識した指導案が書けない」「ねらいとは何かを知らない」等々、保育実習・教育実習等の訪問指導の場面で再三、園長や施設長等から聞かされてきたこともあり、養成校の学習指導において年次を問わず急務の課題である

と考えている。このねらいを意識した指導については、宝仙学園幼稚園での「教育実習Ⅰ」に関わる事前・事後指導でも実習指導室や担当教員が徹底を図っているが、今回は本授業でもその一助を担う形で取り組みを行った次第である。

2. 「子ども会実習」の概要

「子ども会実習」は、グループワークを基本とする。このため、担当教員は、作品創造に直接的に関わる部分だけでなく、会の運営をはじめ受講生が一つのグループとして全員で取り組む事項についても指導・助言しなければならない。このことは、実習生の責任実習や一斉指導に関わる指導等にも重なる部分がある。本学の児童文化の演習が、単なる「子ども会」ではなく、「子ども会実習」と名づけられている所以でもある。

(1) 会の運営

「子ども会実習」では、受講者全員で「子ども会実習班（以下、グループ）」を構成し、グループ全体を総括する「班長」、班長を補佐する「副班長」、グループの協議事項やリハーサル時の指導等を記録する「記録係」、教材費を管理する会計を各1名ずつ選任する。

次に、自主的な話し合いによって希望する演目ごとに集まり「チーム」を結成する（従来、学生たちは2チームに分かれ、同一日に「共演」）。

その後、各チームを総括する「チーム・リーダー」を1名決め、チームごとに子ども会本番までの打ち合わせ会、練習日などのスケジュールを立てて、班長に報告する。報告を受けた班長は、副班長とともに両チーム一緒に「合同リハーサル」や本番前の「判定リハーサル」、本番前日の「招待状配付」「手遊び歌唱指導」「会場設営」な

どについて、担当教員と連携をとりながら調整を行う。

各チームにはそれぞれ1つの演目が与えられる。演目の選定にあたっては前年度までのプログラムや上演の順番、上演の際の観客となる宝仙学園幼稚園側の希望などを参考にしながら、指導教員が決定する。2演目中1演目を指定演目とし、後の1演目については学生たちが自由に選択できる方法等を試みた時期があったが、一部の学生たちだけが興味本意で作品を選択したり、プログラムが重複してしまったりなどの弊害が出てきたため、現在では2演目とも指導教員による指定制を採用している。

(2) 素材研究

各チームは、担当教員の指導を受けながら指定された演目に従い、次のような素材研究を行う。

- ①参加劇、児童劇、人形劇、朗読劇等の脚本のあるチームは、配役を決定する前に脚本の内容を研究する。具体的にはチーム全員で交互に読み合わせを繰り返し行い、まず、作者のねらいとところや物語のテーマ、背後にある事柄、登場人物相互の関係性等について考察する。
- ②脚本のないチームは、当該演目に関する参考図書、ビデオ、公演等の素材を研究し、自分たちの演目内容を決定する。
- ③何れのチームも関連する絵本や童話等を読み、作品に対する理解やイメージを深める。
- ④人形劇の人形、ペープサート、パネルシアター等の制作については、関連する授業での指導や参考図書を活用する。
- ⑤何れのチームも、過去の「子ども会」における上演記録ビデオ、プロの劇団による児童劇等を実際に鑑賞し、研究する。但し、鑑賞の時期については検討が必要で、とくにグループ全体の素材研究や考察が不十分なまま鑑賞することで安易な模倣に陥ってしまうことのないよう注意する。

(3) 脚本研究と配役決定の基本

「子ども会実習」での学びは卒業後の現場での指導へつながるため、将来の保育者として留意すべき劇的表現活動のポイントを以下の通り定めている。

- ①チーム全員が交替に脚本の読み合わせを十分に行うこと。(配役決定は最後)
- ②脚本のねらいや登場人物たちの性格等をチーム全員で考え、自由に意見を交わすこと。
- ③演出、舞台設計、俳優の出入り(上手・下手)、大道具・小道具、音響効果、照明効果、人形劇の場合は人形のデザイン等をチーム全員で考えること。

以上を十分考慮しながら両チームが一体となり、以下についてグループ全体で決定する。

- ①出演者(舞台上で演じる者)
- ②総合司会者(各班:1名)
- ③開演と終演時に歌う「子ども会の歌」と幕間の「手遊び歌」の創作(作詞・作曲・振付)
- ④③の歌唱指導者(司会兼任可:1人または2人)
- ⑤楽器演奏係・音響効果係(兼任可:数名)
- ⑥照明係(兼任可:数名)
- ⑦大道具、小道具、人形劇等の制作係(グループ全員で協力して分担)

その他、以下についてはグループ全員が協力して行う。

- ①各クラスに届ける「子ども会招待状」(計10:本番前日までに実施)
- ②招待状を届ける際に「子ども会の歌」「手あそび歌」の歌唱指導ができるよう準備する。
- ③会場(プレイルーム)の舞台設備(緞帳、中幕、ライト、音響機器、空調等)の操作を熟知しておく。また、非常口や消火器の設置場所の確認と点検を行う。

(4) リハーサル

本番前にグループ全体および各チームが行うリハーサルは、以下の通りである。

- ①チーム別リハーサル:各グループのチーム別に行う自主的なリハーサル。リハーサル時間や場所はチームごとにリーダーが中心となり決定する。
- ②グループ・リハーサル:チームが合同で行うリハーサル。各チームの演目の他、総合司会や手遊び、子どもの入退場の伴奏練習などを含む。チーム・リーダー2名と班長が中心となり、リハーサル時間や場所を決定する。
- ③ゲネプロ:「通しげいこ」。衣装や舞台道具などを用意し、本番と同じように進行する。
- ④判定リハーサル:原則として子ども会本番2日前に可否判定を行う。(以下に詳細)

(5) 判定リハーサル

- ①出演チームと同じグループの他のチームが参観する。(例:A-1が出演:A-2が参観)
- ②上演後、参観チーム全員が1人ずつ作品を講評する。
- ③指導教員の他、指導教員より要請を受けた講師等の合議により可否の判定を行う。
- ④「合格」の場合、班長・副班長は直ちに宝仙学園幼稚園の担当教員に連絡し、開演時刻、会場設営等の打ち合わせを行う。
- ⑤主に練習等を含めて準備が不足していたり、チームとしての一体感が見られなかった場合は「不合格」とな

り、公演延期とする。

(6) 本番当日の環境設定およびまとめ

- ①本番当日は舞台、客席等会場全体の環境設定について幼稚園担当教諭の確認を受ける。
- ②各チームの学生は、出番のない時には子どもたちの近くに座り、観劇の様子や反応等を観察、記録する。
- ③公演終了後は直ちに後片づけをするとともに各保育室を訪ねて子どもたちと担任の感想を聞き、記録する。
- ④所定の教室に移動し、公演記録としてのビデオ等を鑑賞する。
- ⑤ビデオ等の鑑賞、会場の子どもの様子、公演後の感想と自身の感想等をまとめ、提出する。

3. 2012年度「子ども会実習」の実践結果

(1) 宝仙学園幼稚園との協議事項

「子ども会実習」の運営については、前述2.「子ども会実習」の概要で述べたように、前身の短期大学における手順の多くを踏襲している。このうち、公演日等については前年度より宝仙学園幼稚園と事前協議を重ね、本学および園相互の学事日程が決定した後に確定している。

① 公演日の決定

2012年度の「子ども会実習」の公演日（本番）は、2012年12月14日（金）と決定した。これは、以下について考慮、検討した結果である。

- (ア) 受講生の多くが3年次生であることから「教育実習Ⅰ」の実習終了後とすること
- (イ) 幼稚園の冬季休業前であること
- (ウ) 幼稚園の「子ども会」（毎年2月に実施）前に実施し、学生（大学）側から子どもたち（幼稚園）へ演劇的体験の場を提供すること
- (エ) (ウ)により子どもたちが刺激を受け、表現への興味・関心をさらに深め、より主体的な活動が期待できること

② 実習日程との調整

「児童文化」が秋学期開講科目であるため、3年次の受講生は並行して「教育実習Ⅰ」および「教育実習事前事後指導」を履修することとなるが、とりわけ受講生のほとんどが3年次生となった2012年度は、班編成等に従来にはない配慮が必要となった。また、実習日程との関係についても、予備日の設定と「子ども会実習」本番との日程調整が必要となった。本学では、「教育実習Ⅰ」の実施に関して実習園である宝仙学園幼稚園側と「教育実習カリキュラム検討会議」を組織し、実習プログラムや日

程調整等を行っている。この会議で、園側より12月14日（金）を「実習予備日」とする提案がなされ、本番のプログラム運営上詳細な調整が必要となった。というのは、止む無く予備日に実習する受講生が出る可能性が否定できないからであった。しかし、「子ども会実習」本番の日程については既に園側も学事に組み込んでおり変更は難しい。このため、実習優先を基本に園より本番の60分を挟む形で実習カリキュラムを組み、該当学生に対応する案が出された。これを受け、本学「教育実習Ⅰ」担当教員と審議し、「同会議」において担当教員の了解を得ることができた。

③ 演目の決定およびチーム構成

多様な児童文化財の中から選ばれる当該年度の演目は、前年度までに取り上げた演目、受講生数、受講生および観客となる子どもたちの興味・関心等を参考に、さらに園側の要望等を聞き、決定している。2012年度は従来にない数の受講生が履修登録していること、このうち「教育実習Ⅰ」を履修している学生が76名いる一方で、履修規程により実習が見送られた学生が7名にのぼった。昨年度も40名を超える履修生があり、60分のプログラムを20名程度の2グループで構成したが、1人の教員による個別指導のための時間・場所とも限界であったところ、その倍近くの人数を抱えての開講は従来からの運営方法では対応不可能となり、例年以上に園側の協力を乞う結果となった。とりわけ練習場所については、会場となるプレイルームでのグループ全体の練習の他、授業時間内に10名程度の小チームが同時に練習する場所が必要となるが、学内ではその確保が不可能であったため、幼稚園の保育室を借用することとした。

以上のような状況について園側と話し合いを続けるうち、次のような案が生まれ、担当教員から園側に提案した結果、2012年度の演目は『宝仙忍者の宝物』と決定した。

- (ア) 受講生のうち「教育実習Ⅰ」履修の学生は、既存の「実習班」を基本に、前班・後班を合わせて1つのチームとする
- (イ) 「教育実習Ⅰ」未履修の学生は、プレイルームでの「劇」部分を担うチームとする
- (ウ) 本編はプレイルームでの「劇」部分と、各保育室（空組はプレイルーム）での「修行」部分を組み合わせ、60分のプログラムとする
- (エ) 時間的制限および劇部分と修行部分の流れを確保するため、「子ども会の歌」「手遊び歌」は割愛する
- (オ) 子どもたちは、各保育室の「修行」部分の他、プレイルームでの「劇」部分にも全員参加する
- (カ) 「劇」部分の子どもの参加方法等詳細については、園と協議の上、決定する

④ 役割分担

従来の「班長」に替わり、学年（年少・年中・年長）ごとに1名の「学年リーダー」と、教育実習I班（前班＋後班）ごとの「チーム・リーダー」を決め、全員が協力してチームの運営・管理を行うこととした。（「劇」チームも同様とする。）

(2) 授業の実際

「児童文化」の授業実施計画の概要について、シラバスでは、第1回～2回（素材研究）3～10回（グループによる作品創造）について、「素材の他、子ども会実習、劇あそびフェスティバル、巡回公演の日程等により各カリキュラムの割り当てについてはグループにより多少の増減が予想されるが、（途中省略）グループによっては、夏季休業中に実施される場合がある。」と記している。しかしながら、2011年3月11日の東日本大震災に端を発した昨今の電力事情および学園施設の耐震・改修工事に伴う本学教育施設の学園他部門との共同利用等により、夏季休業期間中の実施が困難となったため、一部日程を変更した。（なお、当然のことながら学事等による休講については補講を実施し、本番日を授業最終日とした）

本番を含む15回の授業を通して実施したカリキュラムの中から、主なものを以下にまとめる。

① 「チームワークの実践」についての講義

今回のねらいを達成するためには実践的な授業運営が不可欠である。さらに、受講生数が多く、これまで以上に実習クラスごとの自主的・主体的な取り組みが求められることから、授業開始にあたって以下を内容とする「チームワークの実践」について講義した。

『何をやりたいのか』を考え、賛同してくれる仲間をつくり、共に考え、動くことの大切さを学ぶ。チームワークのなかでは、自分が“伝わっている”と思っても、仲間それぞれには別の考えがあり、必ずしも考えがいつも一緒とは限らない。大切なのは、それぞれの考えを自由に出してもらおうこと。これを、「意識合わせ」といい、こうした環境づくりはとても大事である。また、「意識合わせ」の上で誰かが決定しなければならないときは、責任者（指導教員・担任・監督・演出家・リーダー等）が前に立ち、はっきりと「こうしたい」という方向を示し、実際にグループを動かしていく作業が重要となる。』

② レポート（不安に思うこと・期待していること・児童文化の授業で生かせる特技）

・「不安に思うこと」に、多くの学生が実習との両立を挙げた。同様に、人前に出ることや人前で何かを演じるのが苦手。表現するのが不安といった声や、始まった

ばかりの実習の仲間とうまくやっていけるか。意見の擦れ違いが起こらないかといったグループワークに対する不安も多く出された。その他、本番で緊張しないか、セリフを覚えられるか、子どもたちが楽しんでくれるか等の不安も目立った。

・「期待していること」では、表現することが苦手なので少しでも表現力を身につけたい。表現することを好きになりたい。実習に役立てたい。将来の保育で活かしたい。技術が身に付き、表現の引き出しが増え、自信につながるという声が多く出された。また、周りの意見などを取り入れる視野を広げていきたいといったようなグループで作品をつくることへの期待も出された。

・「児童文化の授業で活かせる特技」では、ピアノ演奏、楽器演奏、歌唱といった音楽的な特技が半数近くの学生から寄せられた。その他には、ダンス、運動、身体を動かすこと、覚えること（暗記）、声を出すこと等が書き出された一方、約一割の学生は、「特になし」と答えている。

なお、これらの「不安」「期待」「特技」は、「期末レポート課題」の1つとして、子ども会実習の実践を通してどのように変化したか、変わらなかったか、実現できたか、期待外れに終わったか、活かせる機会があったか、なかったか等々について学生たちに回答を求めた。

③ 素材研究

今年度に限らず、「子ども会実習」における素材研究については、経験値の下に自分の価値判断が固まることを避け、対象となる児童文化財を立体的に見つめ、柔らかい発想や感覚が生まれるように配慮している。「忍者」は、これまで数回取り上げた素材である。過去に作成した脚本や映像資料等に初めから目を通すのではなく、最初のうちはできるだけ見ないようにし、内容や演技等が固まって初めて振り返るような指導を続けている。もちろん、過去からも、既存のものからも学べることはあり、最初から模倣し、なぞるのも有効ではあるが、やがて続けるうちに違和感を覚えてくるものである。感覚的に「違う」と感じたら、一度は壊してみることの重要性を、とくに「演劇」という生身の世界では大切にしたい。9月から12月まで、グループで、時を積み重ねながら新しい「児童文化財」を創造していく作業においては、常に過去をなぞらない気持ちが大切だと思うからである。そして議論をし尽くした上で、最後は直感に従うようにする。これらの体験を通して人の心が動いていくからである。多くの学生たちが期待する「感動」は、共同体験からこそ生まれるし、グループワークの意味もそこにある。

そこで、各実習チームおよび劇チームに対し、「素材研

究」として、「忍者」に対する各自のイメージを自由に出し合い、グループでまとめる課題を中心に授業を展開した。

各チームより出された「忍者」のイメージと忍術

- 空 (最年少) 手裏剣を投げる・忍法を使う (ポーズ)・静かに小走り・隠れる
- 虹 (年 少) 変身 (チョウチョ・石・動物)・分身・隠れ身・岩飛び
- 星 (同) 忍び歩き・変身 (壁・石)・(折り紙の手裏剣) 上投げの術・下投げの術
- 鳥 (同) 隠れ身・煙幕・まきびし・九の一・分身・変身 (木)・忍者歩き
- 山 (年 中) 忍び足・壁を伝って歩く・手裏剣を投げる・布で隠れ身・吹き矢・床を伝う・変身・綱渡り・刀で切る・速足・水とん
- 雪 (同) 手裏剣投げ・隠れ身・分身・まねっこ・忍び足・変わり身 (変身)・声マネ
- 花 (同) 隠れ身・分身・手裏剣
- 森 (年 長) 影分身・瞬間移動・隠れ身・水とん・変装・火遁・獅子・分身・気合・手裏剣・火・槍
- 月 (同) 影分身・蜘蛛の糸・口寄せ・隠れ身・身代わり
- 池 (同) 隠れ蓑 (新聞紙)・葉隠れ・変化 (変身)・手裏剣・毒玉・畳返し・蜘蛛の糸・物真似
- 劇チーム 忍び歩き・九の一・宝物・泥棒・正義の味方・変身

⑥ 保育室内の「修行」の場面の創作

- 以下を留意し、各保育室での修行場面を脚色する。
- (ア) 子どもの年齢に応じた術を考える。
- (イ) 身体表現の他、言葉を使った術 (合言葉の術等) も用意する。
- (ウ) それぞれの術を担当するメンバーを決め、修行の順番 (術の順番) を決める。
- (オ) チームごとの全体の流れ = 「導入・展開・まとめ」を考え、脚本にする。
- (カ) 脚本には、忍者言葉を取り入れる (〜でござる、など)。

各保育室での修行の場面に登場する忍術

- 空 (最年少) ①変身 ②忍び足
- 虹 (年 少) ①隠れ身 ②岩を飛び越える
- 星 (同) ①変身 ②手裏剣
- 鳥 (同) ①変身 ②剣でツンツン
- 山 (年 中) ①綱渡りの術 ②手裏剣
- 雪 (同) ①変身 ②隠れ身

- 花 (同) ①手裏剣 ②隠れ身
- 森 (年 長) ①手裏剣 ②忍び歩き
- 月 (同) ①蜘蛛の糸 ②手裏剣
- 池 (同) ①手裏剣 ②隠れ蓑

4. 2012年度「子ども会実習」のねらい

「空想の世界で仲間と共に、全身を使って遊ぶ楽しさを体験しながら、身体でいろいろなことが表現できることを知る」を『ねらい』とし、「単に忍者の格好をして遊ぶのではなく、子どもたちがイメージを描きながら忍者になって行動する必然性を感じながら遊ぶことで、よりクリエイティブに遊ぶ姿勢が生まれる」ことをポイントに、保育室での修行とプレイルームでの実践を「劇あそび」にまとめ、完成させることとした。

この授業全体の「ねらい」の他、毎回の授業の具体的な「ねらい」を定め、個々の授業の進展に従って、いわば“スプリングボード”的に「ねらい」が次の「ねらい」へとつながり発展するよう、段階的な「ねらい」を設定する試みを行った。

また、学期末レポートの課題の1つとして「…こうした全体的なプロセスを振り返り、グループの一員としてどのように『ねらい』の達成に向けて自らの役割を果たしたか、自己評価してください。」と出題し、「ねらい」全体を振り返ることとした。

(1) 即興表現

授業で出し合った忍者に対する各自のイメージを即興で、思いつくまま、さらに、動きに変化をつけながら、自由に表現することをねらいとし、学生たちが表現に対する“不安”“こだわり”を和らげ、イメージを広げながら思いつくままに動くことの楽しさを実感できるように、指導教員が見本を示しながら指導した。

① 即興表現に関わる「自己評価」のポイント

- 授業の最後に、以下のポイントに留意しながら「自己評価」をまとめ、提出させた。このポイントは、「ねらい」の意識化を図る役割の他、学生たちが将来、子どもたちと楽しむ表現活動を展開する際の指導上の留意点ともなるものであることを強調した。
- ・忍者になりきって動いている
- ・表現したい忍者のイメージをとらえている
- ・忍者の特徴的な動きをとらえ、感じを込めて動くことができる
- ・変化のある「ひと流れ」の動きにすることができる
- ・仲間の良い動きに気づいている

② 学生のレポート (以下、原文のまま)

「忍者の動きは、頭の中でイメージできるものの、実際にやってみると難しかったです。リズム＝音楽に合わせてどんな動きをしようか即興で考え、動くことが大変でした。年少・年中・年長に合わせた動きをしました。年中・年長は、「ボン！」と音が鳴ったらしゃがみました。年少はしゃがまずに止まるだけでした。このように、年齢に合わせてやり方を変えていく必要があることが大切だと思った。術の決め方が難しかったです。年少に合う術は何か真剣に考えないとできなかつたりするので大切だと思った。ここですべてが決まると思いました。そのクラスに合う子どもに合うものにしなければつまらなくなってしまうので、子どものこととそのクラスの雰囲気をよく知ることが大切だと思いました。」

(2) 修行の場面の動きの工夫と劇の場面の脚本創作

即興表現に続き、「思いつくままに動いて表現を楽しむ」段階から、工夫を加え、動いて楽しむ段階へと進む。ここでは、表現したい忍者のイメージを動きで工夫し、チームごとに「修行の場面」に仕上げ、表現して楽しむことを中心に、グループによる作品(場面)創作を目指した。

① 自己評価のポイント

- ・グループで目的をもって作品(場面)づくりに取り組んでいる
- ・グループのイメージに合った動きに気づき、工夫して動いている

② 学生のレポート

「実習では、普段一緒になることのない前班と後班が、実習でのお互い感じたことを意見交換しながら、脚本の中の難しい言葉を書き直したり、術の案を具体化していくことができ、とても充実した話し合いをすることができたと思う。」

「空組は最年少ということもあり、「命令」などという言葉にピンとこないのではないかという意見が出てきた為、脚本を変え、わかりやすいようにしました。普段、子どもが遊んでいるオバケごっこを取り入れ、オバケに変身などの術を中心に考えました。」

「保育室も大きく使い、皆が見えるよう、わかりやすいよう演じるようにする。悪者は悪者らしく、池組は男の子の方が人数も多いため、そのように工夫している。」

(3) 修行の場面の発表

各保育室でチームごとに練習してきた「修行の場面」を発表する。方法は、10チームの修行チームと劇チームが保育室で(空組は幼稚園玄関ホール、劇チームはプレイルーム)、任意の術1つを他のチーム全員の前で演じることとした。10チームの上演に対し限られた時間内での指導となったが、コメントの他、場面ごとの演技指導に極力努めるようにした。

① 見学のポイント

他のチームの「修行の場面」を見学する際のポイントとして以下を示した。

- ・感じを強めたり、気持ちを込めたりして動くことができているか
- ・表現したい内容を強調するような個人とグループ全体の動きができているか
- ・構成を工夫して個人とグループ全体の動きができているか

② 自己評価のポイント

- ・感じを強めたり、気持ちを込めたりして動くことができたか。
- ・表現したい内容を強調するような個人とグループ全体の動きができたか。
- ・構成を工夫して動くことができたか。
- ・他のグループの良さや表現したいことが見てわかったか。

③ 学生のレポート

「他のクラスを見ていて、恥ずかしがったり、遠慮がちになってしまうと楽しさやおもしろさが伝わらないことが分かりました。思い切ってやりたいと思います。練習をすればする程イメージがクリアになって、細かな部分の注意点も出てくるので、たくさん練習しようと思いました。これからは構成をはっきりさせながら進めていこうと思います。」

「自分なりに気持ちを込めてやっているつもりだったが、他のクラスの子になりきってやっている子がいて、もっと気持ちを込めることができると思った。グループとして、きちんと演じようと言う気持ちが強かったと思う。あとは、セリフを覚え、全体を通し、個々の認識を共有できれば良いと思う。」

「術の名前をしっかり言うことで忍者を演じることに子どもがより入り込めると思った。印を結び、「ニンニン」と言うことで、繰り返すことの楽しさや忍者らしさが出せると思う。学生が感じを強めたり、気持ちを込めたり

して動くことで、子どもの気付きにもつながると感じた。ハキハキ、恥ずかしがらずにやるのが大切だなと思いました。そして、学生が忍者になりきり、子どもたちが「自分もやりたい!」と思えるように学生が動くことが必要だと思いました。子どもたちのイメージや1人1人の表現方法、身体的動きを大切に一つ一つ出していけるように、演じることが大切だと思いました。」

「説明をするのではなく、ストーリーに合わせて教えていくことができれば、子ども達も楽しみながらできると思うので、もっと考えていこうと思う。」

(4) プレイルームでの「劇」部分の仕上げ

前回の発表での“気づき”を持ち寄り、実習チームは各保育室で修行の仕上げ、劇チームはセリフと動きの練習をプレイルームで行った。修行チームについては「修行の場面」の演出の工夫を課題とした。劇的効果を高めるための必要最低限の小道具や効果音、音楽などの活用を促した。

① 自己評価のポイント

- ・ 感じを強めたり、気持ちを込めたりして動くことができたか。
- ・ 表現したい内容を強調するような個人とグループ全体の動きができたか。
- ・ 構成を工夫して動くことができたか。

② 学生のレポート

「忍者のセリフの中で、わざを使う所を特に気持ちを込めて言うように心がけました。印を結んで、「ニンニン」という動きから手裏剣を投げる動きのメリハリをつけました。敵を倒すためのわざであるため、敵を倒す動きの部分を個人と全体で意識して活動しました。今日は3グループそれぞれの動きを確認したあと、全体的な動きを構成しました。他の2つのグループの動きを見て、工夫すべき所の意見も出し合いました。」

「前回の反省点を含めて、動きを少し加えてみたりしました。敵役の方は、ただ変身している子たちを見て終わりにするのではなく、子どもたちに触れてみたりして、変身しているものになりきるよう意識してもらうことも必要だと思いました。」

(5) 本番とまとめ

本番終了後に「グループによる児童文化財の創造」についての「まとめ」を行った。ポイントは以下の通りである。

- ・ 忍者という素材を用いてグループで創造した修行の場面と劇の場面は、いずれも子どもたちを観客とした「児童劇」であるとともに、子どもたちのために創り出した劇的な想像の世界で子どもたちと一緒に遊ぶ「劇あそび」である。
- ・ 授業で示された「ねらい」と「自己評価のポイント」を参考にしながら自らの「ねらい」を確立することが求められる。これらの取り組みによって子どもの表現力を育てると同時に、保育者になろうとする自分自身の自己表現力をさらに高めることが可能となる。

(6) 期末レポート

授業のねらいについて改めて意識化し、グループワークによる創造活動のプロセスで学生たちが何を学んだのか、その一部を紹介する。

① 課題文：「空想の世界で仲間と共に、全身を使って遊ぶ楽しさを体験しながら、身体でいろいろなことが表現できることを知る」を『ねらい』とし、「単に忍者の格好をして遊ぶのではなく、子どもたちがイメージを描きながら忍者になって行動する必然性を感じながら遊ぶことで、よりクリエイティブに遊ぶ姿勢が生まれる」ことをポイントに、保育室での修行とプレイルームでの実践を「劇あそび」にまとめ、完成させました。こうした全体的なプロセスを振り返り、グループの一員としてどのように『ねらい』の達成に向けて自らの役割を果たしたか、自己評価してください。

② 学生のレポート

「グループの中で意見を出しながらも1番は子どもの事を考えて行っていた気がします。子どもがどうしたら全身で表現しながら楽しく行えるかを考えていた。そのために、全身で行える忍者の術はどんなものかと考えた。この忍者の劇遊びは想像力にかかっていると思います。子どもの想像力ははかりしれないものなので、ねらいの“空想”の点では苦労しなかった。一番難しかったのは、“全身を使って遊ぶ楽しさを体験しながら、身体でいろいろな表現ができることを知る。”そのため苦悩しながら意見を出していた気がします。そのためにグループで忍者の修行の練習をしたり、言葉を選びながら子どもを楽しませられるよう、体験できるよう頑張ったと思います。」

「忍者の劇あそびをするに当たってどのような動きをしたらよいか、どのような術や技があるのか、色々調べることができました。役になりきって演じることで、子ども達も忍者になりきって楽しめることが分かりました。また、ただ楽しむだけでなく、イメージしやすいよう悪

役になって思いっきり手裏剣を投げて行動する必要性を感じてもらおうようにしました。本番で通してやってみて、(宝仙学園幼稚園)園長先生の話(終了後の講評)の中で、まだ恥ずかしさがあると言っていたので、役になりきれていなかったと思いました。どろぼうも忍者も全身で演じて、それが子ども達に伝わるととても良い劇になったと思います。クラスの子も達も私たちを見て忍者になって思いっきり手裏剣を投げていたのですごく楽しくできました。待っている間も常に忍者を意識した声かけが必要だと気づきました。なので楽しさだけでなく、イメージしやすい言葉や行動をもっと意識できればよかったなと思います。また、ピアノや楽器を取り入れることによって、より雰囲気作りができて良かったと思いました。このようなクリエイティブに遊ぶ体験を、子ども達と一緒にすることができて、勉強になりました。」

「劇を行う準備として小道具の作成、台詞の入れ込み等、劇を成り立たせてせる上で必要最低限の努力は自分なりにした。班の中で自然と個別配慮やクラスの姿が話題に出るよ に話の流れを持って行き、意見を出す事ができる様にした。当日の動きは、子ども達の動き、時間、外(廊下)の様子を見て展開していった。台詞が飛んでいる様子であれば、まとめて発言し、時間が余る様であれば台詞をゆっくり言う・アドリブを入れる・術の展開を変える等して工夫した。今までの実習で見てきた子ども達の姿を照らし合わせて、声掛けをすることができた。宝仙学園幼稚園で学んだことを活かせる活動であったと考えている。反省点は、もっと前に出て指示すべきであったと思う点だ。自己管理(精神面でも、身体面でも)を最優先し、リーダーにはならなかったのだが、今までの作業をふり返ってみればリーダーになり、進んで活動するべきであったと反省している。自分がどの位まで頑張る事ができるかを把握し、できるようであれば、班を引っぱる役を務め、引っぱっていく事が次の課題であると考えている。」

5. まとめ

2012年度の「子ども会実習」は、作品創造と共に授業のねらいをどのように学生たちに意識させたらよいかを試みることであった。そのために設定した自己評価のポイントが、将来、保育者として子どもの表現をどのように評価したらよいかを考える際の一つの視点の持ち方となりうることをくり返し強調したものの、このことをどれだけの受講生が実感できたのか、レポートを見る限り確信にまで至らなかった。本番に向けての毎時の振り返りと課題の提示を繰り返しながらも、一貫したねらいに

対する意識づけが不十分であったと思われる。原因として考えられるのは(1)実施時期と(2)指導体制である。

(1) 実施時期

「3・4年次秋学期開講」には再考を要する。「子ども会実習」本来の目的を達成するためには、受講生は少なくとも「教育実習Ⅰ」を修了していることを求めたい。現行のカリキュラムでは、「教育実習Ⅰ」が同時進行の形で展開している。この時期には促成栽培的に意識や技術が植えつけられるわけではなく、これまでの教室での学びを振り返り、実習での実践的理解をさらに教室での学びで確たるものとしていく必要がある。学生たちが試行錯誤を繰り返しながらも次第にクラスごとの一斉活動や責任実習に向けて意識的にも技術的にも子ども理解が深まる中でこそ、「子ども会実習」のねらいを実感できるはずである。「子ども会実習」は、グループによる創造的な活動であるから、今年度のように実習クラスを単位としたグループ編成の場合、実習に寄与する側面も期待されるが、本来的には実習クラスの育ちは実習そのものから生まれるものである。だからこそ、「子ども会実習」では、受講生が個々の実習経験を生かしながらも実習クラスとは異なるグループに所属し、実践的に活動することがグループワークの効果をより高めるものとなる。

また、今年度の受講生のうち、7名は教育実習の履修要件を満たしておらず、所属するクラスがなく、幼稚園側と協議の上、一斉活動と同様に実施される保育室内の「修行の場面」への参加を見送らざるを得なかった。この7名の学生たちは「劇」部分を創り出すチームを編成したが、実際に子どもとの一斉活動的な体験がないまま、想像力を頼りに場面ごとの子どもの様子を考えたがの脚本作りとなり、やはり限界があった。

さらに、幼稚園の希望する冬期休暇前の公演時期は、教育実習Ⅰの山場ともいえる「責任実習」の時期とも重なり、多くの学生が実習と子ども会が両立できるか否か、精神的プレッシャーと肉体的負担を抱える結果となる。

以上から、結論として、受講条件に「教育実習Ⅰを履修していること」が付記されることで、授業の本来的な教育目的が達成できると考える。

(2) 指導体制

指導教員1名という現実体制のままでは、本授業による特色ある表現教育の指導は不可能であり、上記の履修条件に加え、受講生数の制限が求められる。これは教室の数にも関係し、少なくともゼミ程度の20名前後の少人数クラスを複数運用するための教室等の確保が必須となり、さらに時間割編成上も著しい困難が予想される。従って、「選択科目」としての特色を生かす意味でも、保

育者養成校として求められる一定水準以上の、質の高い表現者を目指す学生のための少人数クラスによる演習科目としての位置付けを望みたい。

(付記)

本報告では、2012年度の「子ども会実習」を受講した学生のレポートの一部を掲載しています。ここに紹介できなかったさまざまな声から、学生たちが実習を通して多くの知見を受けていることをうかがい知ることができました。宝仙学園幼稚園園長田苗孝子先生をはじめとする宝仙学園幼稚園の先生方および本学教育実習Ⅰ実習指導の先生方には、日程調整をはじめ、演目の決定や授業の展開について、丁寧なご指導、ご配慮をいただきました。ここに改めて感謝申し上げます。